

先スペイン期メソアメリカにおけるイヌの象徴性 －中米の世界観に関する一試論－

吉田 晃章

はじめに

先スペイン期のメソアメリカ (Mesoamerica) では、古くから、イヌを人間とともに埋葬する習慣があったと考えられる事例が見つかっている。例えば、イダルゴ (Hidalgo) 州のワバルカルコ (Huapalcalco) 遺跡にあるテコロテ (Tecolote) 洞窟には、2体の被葬者とともに5匹のイヌの遺骸が発見されている¹。また、プエブラ (Puebla) 州のテワカン (Tehuacán) 盆地でもイヌを伴う埋葬が見られ、前者はおよそ紀元前3500年ごろ、後者はおよそ紀元前3200年ごろのものと推定されることから、先古典期前期 (前2000-前1000年) より以前から、すでにイヌを副葬する習慣があったと考えられる。さらに、メキシコ西部地域では、コリマ (Colima) 州を中心に、ハリスコ (Jalisco) 州やナジャリ (Nayarit) 州などで、イヌの象形土器が副葬品として納められている事例が数多く見つかっている² (図1)。イヌの象形土器には、人の仮面をつけたものや、双頭のイヌ、トウモロコシをくわえたイヌなどのほか、立って踊る二匹のイヌなど、実にさまざまなものがある。これらのイヌは、皺のある顔で表現されていることもあり、多くは丸々と太った姿をしている。

イヌが人間と共に埋葬されること、あるいはイヌの象形土器が副葬品として納められることについて、これまで、1) 死後の世界へ行った死者が食料に困らないように³、などと解釈されてきたが、もっとも一般的な解釈は、2) 死後の世界への旅路にはイヌの助けが必要だと考えられていた⁴、というものである。この解釈は、16世紀にベルナルディーノ・デ・サアグン神父 (Fray Bernardino de Sahagún) が纏めた『フィレンツェ文書 (Códice Florentino)』に記録されている、アステカの人々が考えていた死後の世界への旅の様子⁵に基づいている。『フィレンツェ文書』によれば、死者はミクトラン (Mictlan) と呼ばれる死後の世界へ向かって旅をすると信じられていた。死者はさまざまな難所を越えてミクトランを目指す⁶が、7番目の地点にチコナワパン (Chiconahuapan)⁶という大河があり、この河を渡るためにはイヌの助けが必要であったというのである。

この記述に基づいて、オットー・ションドゥーベ・B. (Otto Schöndube B.) は、「イヌの役割は食料という意味をはるかに超えるものであった。メキシコの神話において、イヌは死者の伴侶であり、道先案内をするものであった。死後の世界への道のりにおいて、生じてくる障害を取り除き手助けとなる忠実な友であった」⁷と述べており、また、カロライン・パウス・シトロム (Carolyn Baus Czitrom) は、「イヌは、死者と地下世界と密接な関係があった。一般的な信仰に基づく、イヌは、冥界への旅において死者の魂の案内役であった」⁸と

解釈しており、さらに解釈を一步進めて、夜の太陽を夜明けへと導くシヨロトル神 (Xolotl)⁹ とイヌとの連関性についても示唆している¹⁰。

本稿では、まず、アステカの暦に用いられていたイヌを表す記号の属性と、絵文書や神話に描かれたイヌと神々や人間との関わりについて考察する。さらに、イヌの特徴を備えた神と、その他の神々との関係について考察し、メソアメリカ、特にアステカの人々がもっていた世界観という大きな枠組みの中で、イヌに与えられた意味を明らかにしてみたい。

1. アステカの暦と絵文書にみられるイヌの表象

1-1. 暦に用いられたイヌを表す記号について

サアグンは、『フィレンツェ文書』の中で、征服されて間もないヌエバ・エスパニーヤ (Nueva España) のさまざまな事柄に関して記録を残している。これによれば、イヌにはさまざまな種類があり、それぞれ、チチ (chichi)、イツクイントリ (itzcuintli)、シヨチオコヨトル (xochiocóyotl)、テトラミン (tetlamin)、テウイツォトル (teuítzotl) と呼ばれていたと言う¹¹。また、シヨロイツクイントリ (xoloitzcuintli) と呼ばれる体毛のないおとなしいイヌもいた。さらに、トラルチチ (tlalchichi) と呼ばれる背の低い丸々としたイヌは、食用であったとも述べている。これらのイヌに加え、植民地時代後期の記録ではあるが、フランシスコ・ハビエル・クラビヘロ (Francisco Javier Clavijero) は、埋葬儀礼に関する内容を記した中で、テチチ (techichi) というイヌについて言及している。このイヌは、金色の毛をしており、主人の埋葬に伴って殺され、あるいは焼かれたりして副葬されたと記述されている¹²。

こうした記録から、イヌの名称や、当時の社会において現実にイヌがどのように扱われていたのかを伺い知ることはできるが、先スペイン期のメソアメリカの人々がイヌを人間とともに埋葬した理由を考えるためには、アステカ時代に用いられていた暦や絵文書の内容が手掛かりになる。ここでは、まず、トナルポワリ (tonalpohualli) と呼ばれる260日の暦について考察する。トナルポワリを構成する20種類の記号の中に「イヌ」を表す記号があるからである。

アステカでは、一般に、シウイトル (xihuitl) と呼ばれる365日暦と、トナルポワリという260日暦のふたつが用いられていたことが分かっている。

シウイトルは、1ヶ月を20日とした18ヶ月の後に5日間を加えて365日を構成する暦である¹³。各月には、それぞれ異なった名称が付けられていた。例えば、第1の月は、アトルカワロ (atlcahualo) と呼ばれ、「雨がやむ」という意味である。また、第2番目の月の名称「トラカシベワリストリ (tlacaxipehualiztli)」は、「人間の皮剥ぎ」という意味である。最後の5日間はネモンテミ (nemontemi) と呼ばれ、「不吉な日」と考えられていたようである。サアグンの記録によれば、毎月、さまざまな神々を祀る儀礼が行われていた。

一方、イヌを表す記号が用いられているトナルポワリは、数字の1から13と、20種類の記

号を組み合わせて作られた暦である¹⁴。数字は、1を表すには点を1つ、2を表すには点を2つ、というように点の数で表現され、20種類の記号は、さまざまな事物や事象を表している。シパクトリ (cipactli : ワニ)、エヘカトル (ehecatl : 風)、カリ (calli : 家)、クエツパリン (cuetzpalin : トカゲ)、コアトル (coatl : ヘビ)、ミキストリ (miquiztli : 死)、マサトル (mazatl : シカ)、トチトリ (tochtli : ウサギ)、アトル (atli : 水)、イツクイントリ (itzcuintli : イヌ)、オソマトリ (ozomatli : サル)、マリナリ (malinalli : 草)、アカトル (acatl : 葦)、オセロトル (ocelotl : オセロット¹⁵)、クワウートリ (quauhtli : ワシ)、コスカクワウートリ (cozcaquauhtli : ハゲワシ)、オリン (ollin : 動き、地震)、テクパトル (tecpatl : 火打ち石)、キアウイトル (quiahuitl : 雨)、ショチトル (xochitl : 花) である。これらの記号と数字の1から13が、順に組み合わせられて一日一日が数えられていく。たとえば、一日目は「1のワニ」、二日目は「2の風」、三日目は「3の家」となり、14日目には、数字が1に戻り、21日目には記号が「ワニ」に戻って循環し、最後の数字「13」と最後の記号「花」が噛み合うのが260日目となる。アステカでは、前述したシウイトル (365日暦) とトナルポワリ (260日暦) とをあわせて52年で一巡する大周期ごとに、盛大な祭りが行われた。

イヌを表す記号イツクイントリは、トナルポワリ (260日暦) の10番目の記号であり、『テレリャーノ・レメンシス絵文書 (Codex Telleriano-Remensis)』など数多くの絵文書に描かれている¹⁶ (図2)。また、20種類の記号によって表わされる日には、それぞれ守護神 (Patrón) が定められており、イツクイントリの日々の守護神は、冥界の神であるミクトランテクトリ (Mictlantecuhtli) であった。また、アルフォンソ・カソ (Alfonso Caso) は、組み合わせさせた数字によって、守護神とは別に、その日を表す神々の名があったと述べている¹⁷。カソによれば、「1のイツクイントリ」はシウテクトリ (Xiuhtecuhtli) とシベ・トテック (Xipe Totec) の別名であり¹⁸、「3のイツクイントリ」はシウテクトリ (Xiuhtecuhtli) とイツタパルトテック (Itztapaltotec)、「5のイツクイントリ」はミクトランテクトリ、「9のイツクイントリ」は女神チャンティコ (Chantico)、「13のイツクイントリ」はトラウイスカルパンテクトリ (Tlahuizcalpantecuhtli) の別名である。

イヌの記号は数字と組み合わせることで、記号そのものを守護する神のほかにも、特定の神々と関係付けられていたことになる。カソが示したそれぞれの組み合わせに関連する神々の属性から、「イツクイントリ」の日にどのような特徴が見られるのかを考察する前に、まず、絵文書に描かれたイヌと神々との場面について見てみたい。

1-2. 絵文書にみられるイヌの表象について

トナルポワリ (260日暦) において、イヌの記号が当てはまる日は、ミクトランテクトリが守護神だが、ミクトランテクトリとイヌとの関係は、『ロード絵文書 (Codex Laud)』や、『ボルジア絵文書 (Codex Borgia)』などに明瞭に描かれている。

『ロード絵文書』には、死者が行う一連の旅の様子が描かれており¹⁹、3D頁には、死者とともにミクトランテクトリの前に進み出るイヌの姿が描かれている (図3)。イヌも、亡く

なった人物も紙の巻物のような物をミクトランテクトリに差し出している。ミクトランテクトリは、折れた骨の針（あるいは杖）を持ち、片膝をついた姿で描かれている。また2頁には、イヌが死者をつれて、冥界の川を渡る様子が描かれていると考えるものもある²⁰。また、『ボルジア絵文書』の13頁には、ミクトランテクトリの前にイヌが描かれている²¹。このイヌには、黒い斑紋があり、胴体には心臓と思われるモチーフが付けられている。イヌの上には、布で包まれた遺骸が大地の怪物の大きな口に飲み込まれる様子が描かれている。

『ロード絵文書』においても『ボルジア絵文書』においても、イヌが死の神ミクトランテクトリと関連付けられていたことを示しているのは明らかである。特に、『ロード絵文書』に描かれた場面は、先述した、イヌが死後の案内役であるという解釈の根拠にもなっている²²。メルセデス・デ・ラ・ガルサ (Mercedes de la Garza) は、『ロード絵文書』のこの場面が、死を決定付けるため、冥界の神の前に魂が現れる瞬間であると考えている²³。

さらに、『ボルジア絵文書』の71頁には、イヌが太陽神トナティウ (Tonatiuh) に生贄を捧げる場面が描かれている²⁴ (図4)。場面の左側には、トナティウが太陽の象徴であるディスクとともに描かれ、椅子に座っている。イヌは彼の前に跪き、鳥の首を切っており、頭上には、月を表すウサギ²⁵と夜の星々を示す帯が描かれている。イヌに切られた鳥の首からは細長い血の帯が出ており、トナティウの口元まで続いている。また、場面の手前には、鳥の首が大地に置かれ、首から血が放射状に飛び散っている。またトナティウの座る椅子の下には、折れ曲がった二本の棒を組み合わせ、Xのような形をした「オリン (動き、地震)」の記号と4つの点が書かれており、トナルポワリ (260日暦) の「4のオリン」の日、と読める。

この場面では、天に月が描かれており、夜であることがわかる。つまり夜の太陽に、イヌが鳥の生贄または血を捧げている場面だと考えられる。この場面からは、イヌが死者や冥界の神ミクトランテクトリとは別に、太陽神や生贄とも関係付けられていたことを読み取ることができる。このことは、ショロイツクイントリという名辞の語義からも確認できる。

征服後50年ほど経ってアロンソ・デ・モリーナ (Alonzo de Molina) 神父が編纂したナワトル語の辞典²⁶をもとに、ショロイツクイントリの語源を辿ることによって、その関係性を確認し、解釈の裏付けとしたい。

ショロイツクイントリは、ショロ (xolo) とイツクイントリ (itzcuintli) に分けることができる。ショロあるいは、ショロトル (xolotl) とは、「小姓 (paje)、青年・下級の使用人 (moço)、召使 (criado, esclau)」を意味し、主人等につき従う存在を意味している。一方、イツクイントリは、一般的にイヌと訳があてられるが、さらに語源を紐解けば、itztli (ナイフとして使用された黒曜石またはその断片) とcui (取る、持つ、尊敬するなど) という動詞から構成される語と考えられる。cuiという多義的動詞から、一義的に解することは難しいが、「黒曜石 (のナイフ) を持つもの」と推察すれば、生贄を執行する者というイメージが生まれる。また、テウイツォトル (teuítzotl) という言葉は、「石 (tetl)」と「棘、とがったもの (uitztli)」という二語が語源になっているものと考えられる。uitztliからは、「物の長い」とか「爪の鋭い」というイヌの外見上の特徴を想像することもできるが、字義通り「石の尖っ

たもの」換言すれば「石のナイフ」という解釈が適当で、やはり生贄との関連が伺える。『ボルジア絵文書』で見られた犬が供物を捧げる行為を思い起こすと、イヌの語源と絵文書の神話的場面におけるイヌの役割が関連しているという可能性も十分指摘できよう。

絵文書に描かれたこれらの場面から、次のように考えることができよう。第一に、死者がイヌに伴われてミクトランテクトリのいる場所へ辿りつき、大地の怪物に飲み込まれていく場面からは、イヌは、死者が「死」をまっとうするために付き添う存在として考えられていたと解釈することができよう。また、第二に、イヌが太陽神に対して供物を捧げる場面では、この行為が、昼ではなく、太陽が西の地平に沈んだ後、あるいは沈む際に行われていることに注目しなくてはならない。ここに描かれた太陽は捨象して言えば「夜の太陽」であり、イヌは、「夜の太陽」に対して供物を捧げる役割を担っていたと解釈することができるのである。

つまり、イヌの表象は「死者」や「夜の太陽」とともに描かれ、死者がなすべき行為を遂行する手伝いをし、また、没した後の太陽に付き添う存在であったと解釈できるのである。では、イヌは、なぜ沈んだ太陽へ供物を捧げるのであろうか。この意味を考えるためには、カソの指摘する、数字と組み合わさったイツクイントリの日に当てられたそれぞれの神との関係をみていく必要がある。

1-3. 「イツクイントリの日」と神々との関係について

カソによれば、「1のイツクイントリ」はシウテクトリとシベ・トテックの別名である。『フィレンツェ文書』では、シベ・トテックは、人間の皮を被った神として描かれている²⁷。この神の祭トラカシベワリストリでは、直前にテマラカトル (Temalacatl) と呼ばれる戦闘が行われ、捕虜として捕まった者の皮を剥ぎ、勝った戦士がその皮を着る。戦士は、町で模擬戦をしながら歩き回り、20日後に腐敗しきった皮を脱ぎ捨てる。この祭は、征服当時、春に行われていたらしく、農耕に関連し、植物の再生や萌芽を象徴していたと考えられる。実際、この神の表され方は、腐った外皮を養分として新しい芽が出てくる様に似ている²⁸。

植物の種から新しい芽が芽吹くことは、この種を残した前の世代から新しい世代へと命が受け継がれることを示しているのであり、いわば命が再生すると考えることもできよう。シベ・トテックの祭りは、捕虜を生贄としてその皮を剥ぐことで「犠牲」を伴い、剥いだ皮を被ったのちに、この皮を脱ぎ捨てることで、「命の誕生」とともに、前の世代から受け継いだ「命の再生」を意味しているのである。

次に、「1のイツクイントリ」と「3のイツクイントリ」の別名であるシウテクトリ (Xiuhtecuhtli) について見てみよう。この神は、メキシコ中部で信仰されていた火の神であり、「トルコ石の王」を意味する。背中には、火のへびを意味するシウコアトル (Xiuhcoatl) を伴っている²⁹。また「9のイツクイントリ」の別名であるチャンティコは、竈の神である。つまりシウテクトリもチャンティコも火と関連する神である。火は、『チマルポボカ文

書 (*Códice Chimalpopoca*)』³⁰に収められている神話「太陽の伝説 (Leyenda de los Soles)」³¹において、太陽が生まれる際に重要な要素のひとつであった³²。以下にその概要を記す。

世界が暗闇に覆われていたとき、神々は太陽を作ることにした。太陽になるためにテクシステカトル (Tecuciztecatl) が名乗り出た。つづいてナナワツイン (Nanahuatzin) も立ち上がり、二人は四日間の苦行に入った。その後再びテクシステカトルとナナワツインを中心に神々が集まり、二人はいよいよ太陽になるために、火に身を投げることになった。しかし、テクシステカトルは恐れをなし、二の足を踏んだ。そして神々は、ナナワツインに命じ、彼は恐れることなく火の中に飛び込んだ。それを見てテクシステカトルも後に続いた。ナナワツインは太陽に、テクシステカトルは月になった³³。

火の中に飛び込み自らを犠牲にした神々から、太陽と月は生じた。換言すれば、太陽が生まれるために、火は必要不可欠なものだったのである。ここにおいても、シペ・トテックの属性から考察したことと同じように、神々の「犠牲」と太陽の「誕生」というふたつのモチーフを読み取ることができる。さらに重要なことは、神話の脈絡から考えれば、神々が火に飛び込む時、まだ空には太陽がなく、いわば「夜」あるいは「闇」の世界であったとも考えられることである。「イツクイントリ」の日を守護するミクトランテクトリのもつ属性と一致していることにも注目すべきであろう。

最後に「13のイツクイントリ」の別名であるトラウイスカルパンテクトリは、明けの明星とされ、金星神ケツァルコアトル (Quetzalcoatl) の化身である³⁴。植民地時代に書かれた『チマルポポカ文書』に収められている「クアウティラン年代記 (Anales de Cuauhtitlan)」によれば、ケツァルコアトルは火葬されたのち、トラウイスカルパンテクトリに生まれ変わったという³⁵。メアリー・エレン・ミラー (Mary Ellen Miller) とカール・タウベ (Karl Taube) は、トラウイスカルパンテクトリは、「明けの明星の神であり、金星の特に獐猛で危険な側面を表している」³⁶と述べている。図像的な特徴としては、槍や投槍、盾などを持った姿で表現されている (図5)。さらに「太陽の伝説」では、トラウイスカルパンテクトリは、生まれたばかりの動かない太陽に、血を要求されたことに怒り、太陽に矢を放ったと記されている³⁷。

シペ・トテックの儀礼やシウテクトリに関連する火によって表される「犠牲」や「再生」のモチーフとは異なり、トラウイスカルパンテクトリは、生まれた太陽が要求する「血」という供物を拒むだけでなく、太陽に向かって矢を放っていることに注目しなくてはならない。メソアメリカ研究において、一般に、金星は「明けの明星」にせよ「宵の明星」にせよ、太陽に付き従う存在であり、金星そのものはケツァルコアトルとして表現されていると考えられてきた。しかし、ケツァルコアトルの分身であり、「明けの明星」であるトラウイスカルパンテクトリには、太陽と対峙する要素が含まれているのである。

なぜこの神が、「13のイツクイントリ」の日の別名となるのだろうか。死、犠牲、再生と

関連付けられていた「イツクイントリ」の日、あるいはイヌによって表される日の意味をさらに考察するためには、ケツアルコアトルやトラウイスカルパンテクトリとイヌとの関係性についてみていく必要があるだろう。

2. ショロトル神について

トナルボワリ（260日暦）に用いられるイヌを表す記号には、ミクトランテクトリ、シベ・トテック、シウテクトリ、チャンティコ、トラウイスカルパンテクトリという特定の神々が結び付けられていた。1) ミクトランテクトリとの結びつきは、死者がミクトランへと向かう旅に付き添って、さまざまな障害を取り除くという、イヌの役割を物語っている。2) シベ・トテックとの結びつきは、生命の誕生や再生を促すために、生贄や供物などの犠牲を用意するという役割を示している。3) シウテクトリやチャンティコとの結びつきも2)に共通するが、再生に必要な火との関係を明確に示していると解釈することができよう。4) トラウイスカルパンテクトリとの結びつきについては、イヌが金星と関係付けられていることを示唆していると考えられるが、ひとつ疑問が残る。すでに述べたように、トラウイスカルパンテクトリは金星神であるケツアルコアトルの化身であって、金星そのものというより、金星のひとつの現れ方である「明けの明星」としての性格をもっていることである。なぜ、「13のイツクイントリ」の日の別名は、ケツアルコアトルではなく、トラウイスカルパンテクトリと考えられていたのだろうか。ここでは、ケツアルコアトルに関する神話をもとに、イヌとトラウイスカルパンテクトリとの関係について考察する。

2-1. ケツアルコアトルとショロトル

先に述べたように、『ボルジア絵文書』の71頁には、イヌが太陽神トナティウに生贄を捧げる場面が描かれていた。この場面とよく似た場面が『ボルボン絵文書 (Codex Borbonicus)』の16頁にも描かれている。四方を水に囲まれ、死んだ太陽あるいは沈み行く太陽と向きあうイヌの姿をした神が描かれている³⁸ (図6)。太陽のディスクが大地の怪物に飲み込まれていく様を描いているが、太陽のディスクは、布で包まれ紐で縛られている遺骸に付けられている。対置されるショロトル神は、右手に儀礼用のナイフ、胴体中央部に5つの突起を持つ巻貝の断片、すなわち、エカイラカツコスカトル (ecahilacatzcōzcatl)³⁹と呼ばれる金星の表象を身に着けている。ショロトルと太陽の間には、動物の足を載せた供物台が置かれている。ガルサは、この場面は死んだ太陽に、ショロトルが供物を捧げているところだと考えている⁴⁰。

この場面に描かれたショロトルのイメージは、第1章で見た沈んだ太陽に供物を捧げるイヌのイメージと重なってくる。

ショロトルは、金星神ケツアルコアトルのナワル (nahual)、すなわち分身であるという解釈は、現在のメソアメリカ研究者に共通する解釈であり⁴¹、神話において、ケツアルコアトルが文化英雄として語られる一方で、ショロトルは病気や身体的な奇形と関連があったとも考えられている⁴²。ゼーラーによれば、「ショロトル」は、メソアメリカの南部に起源をも

つ神で、天界から走り降りる火、または天界で燃え上がる光を表していると解釈され⁴³、おそらくサポテカ (Zapoteca) 族が信仰していた太陽の神であったのではないかと考えられている。また、ルイス・スペンス (Lewis Spence) は、絵文書に描かれたシヨロトルについて、「オリン (動き・地震)」の記号で象徴され、球戯と関連する神であり、太陽や月とともに移動し、いずれかと球戯をすることも述べている。同時に「蝕」の神、太陽を飲み込む怪物でもあり、影の存在としてすべての物事の二重性を表している、と解釈している⁴⁴。また、ロレット・セジュールネ (Laurette Séjourné) は、ケツアルコアトルのもつさまざまな属性に関する研究の中で、シヨロトルと金星やケツアルコアトルとの関係を論じ、シヨロトルは天界から下降する火であると解釈している⁴⁵

このように、「シヨロトル」がどのような神であったのかはさまざまに論じられているが、ここではまず、ケツアルコアトルとシヨロトルに関係する神話について考察してみたい。絵文書に描かれた、「シヨロトルである」と同定されている神の図像には、この神の名称そのものを表す記号は付されておらず、この神が「シヨロトルである」という解釈は、文字によって記録された神話をもとに行われているからである。

シヨロトルとケツアルコアトルの関係を最も良く示しているのは、『チマルポボカ文書』に残された「人間の誕生」にまつわる神話である。以下にその概略を記す。

神々は相談し、「天がとまり、大地の主が動かずにいるが、誰がそこに住むのだろうか」と言った。シトラリニクエ (Citlallinicue)、シトララトナック (Citlallatonac)、アパンテウクトリ (Apanteuctli)、テパンキスキ (Tepanquizqui)、トララマンキ (Tlallamanqui)、ウイクトロリンキ (Huictlollinqui)、ケツアルコワトル (Quetzalcóhuatl)、ティトラカワン (Titlacahuan) たちは相談し、ケツアルコワトルが、死者の国ミクトランへ向かった。

ミクトランテウクトリ (Mictlanteuctli) とミクトランシワトル (Mictlancihuatl) のもとに着くと、「お前が守っている貴重な骨をもらいに来た」と言った。ミクトランテウクトリは、「それで何をやるのだ、ケツアルコワトル」と尋ねた。

彼は「神々はこの骨で地上に住むものを創ろうとしているのだ」と答えた。ミクトランテウクトリは彼にホラ貝 (caracol) を吹いたら骨を渡すことを約束するが、そのホラ貝には穴が開いていなかった。ケツアルコワトルは虫を呼び出して、穴を作らせ、大きなハチを中に入れて音を出させた。ミクトランテウクトリは約束どおり骨を渡すが、僕たちに対して、彼にその骨を持っていかせるなど命じる。ケツアルコワトルは、「いや、永久にもらっていく」と言い、自分のナワル (シヨロトル) には、「骨を置いていこう」と言わせる。そしてすばやく、骨を持って上へ昇っていった。

ミクトランテウクトリは再び僕に、「ケツアルコワトルは、本当に貴重な骨を持って行ってしまった。穴を作りに行け」と命じ、彼らは穴を作りに向かった。ケツアルコワトルは穴に落ちて、気を失ってしまう。貴重な骨は地面にばら撒かれ、ウズラがそれを啄んだ。しばらくして、ケツアルコワトルが気を取り戻して、骨を拾い集めて、それをタモアンチャン

(Tamoanchan) に持って行った。それを鉢に入れ、その上にケツアルコワトルが自分の手足から血を抜き取ってかけた。他の神々も苦行を行った⁴⁶。そして人間が創造された⁴⁷。

バール・カートライト・ブランディジ (Burr Cartwright Brundage) は、この物語に登場するナワルは、ショロトルであると解釈しており、ミラーやタウベをはじめ、多くの研究者達が同様の解釈を行っている⁴⁸。またスペンスとジャック・スーステル (Jacques Soustelle) は、骨をとりに行ったのはショロトルであるとも記述している⁴⁹。

この神話では、1) ショロトルは、ケツアルコアトルが、骨をとりミクトランへ行くのに付き添っており、2) ミクトランでケツアルコアトルがやるべきことを遂行できるように手伝っているのである。つまり第1章で述べた、イヌが死者の死後の旅に付き添うのと同じように、ショロトルとケツアルコアトルとの関係が描かれていると考えることができよう。

次に、先にも取り上げた、サアグンが記録した「太陽の創造」に関する神話について見てみたい。ここでは、太陽と月が現れた後、ショロトルが自ら生贄になることを拒む様子が描かれている。

火に身を投げたナナワツィンは太陽に、テクシステカトルは月になった。しかし空に昇ったもののどちらも動かないので、神々は命を絶ち自ら生贄となることに決めたが、ショロトルは、泣いて目を腫らし、その場から逃げ出した。この時、ショロトルはさまざまなものに姿を変える。始めは双子の穂軸をもったトウモロコシ、続いてメショロトル (mexólotl) と呼ばれる二本一緒のマガイ (リュウゼツランの一種)、最後にアショロトル (axólotl)⁵⁰ というサンショウウオの一種に化けたが、結局捕まり殺されてしまった。しかし、それでも太陽は動かず、最後に神々の命を奪う役をしていた風の神エヘカトル (Ehecatl) が働き、太陽と月を動かした⁵¹。

第1章で見たように、イヌは太陽に生贄や供物を捧げる存在であり、再生と結びついていますが、この神話でもショロトルと生贄あるいは供物との関連性が示唆されている。ただし、これらの神話の中には、双子や変身といったモチーフが登場する。こうしたモチーフはイヌに伴うモチーフには見られなかったが、ショロトルのxolo-という語には、「双子」という概念が含まれており、まさにショロトルの分身または二重性という特徴を的確に表している。つまり、ショロトルは、ケツアルコアトルの分身であり、双子であることは語義的にも明らかである。これを裏付けるように、ケツアルコアトルの呼称の一部であるコアトル (ヘビ) にも、「双生児」の意味がある⁵²。アステカに限らずマヤなどでも、金星神は双子として語られている⁵³。さらにケツアルコアトルのナワルという言葉が示すように、ショロトルは変身という特徴も備えている。これはケツアルコアトルが、ショロトルとして語られたり、明けの明星トラウイスカルパンテクトリとして語られたり、風の神の側面として語られるエヘカトルであることに通ずる。現れるコンテキストにおいて、ケツアルコアトルはその形態が

異なるのである。このように、ショロトルには、双子や変身という特徴が備わっている。

また、「人間の創造」にまつわる神話では、骨は新たに人間を創造するために必要な材料であったことが読み取れる。メソアメリカにおいて、骨が誕生や再生といった事柄に結びつくと考えられる事例はアステカと同様マヤにも見ることができる⁵⁴。

さらに、この神話には、ホラ貝が登場している。吹くことができれば、貴重な骨を持っていくことができるが、ミクランテクトリから渡されたホラ貝は穴があいておらず、吹くことのできないホラ貝である。本来ホラ貝が、あるべき状態ではなく、常とは異なる状態になっていることに注目すべきだろう。この場面からは、物事の異常性が見て取れるのである。異常な状態を考えたとき、ショロトルが『ボルジア絵文書』に描かれている姿が想起される。

『ボルジア絵文書』の10頁に登場するショロトルは、手足が折れ曲がっている⁵⁵。太陽誕生神話でみたように、泣き明かしたためか涙、あるいは眼球が飛び出している(図7)。口元には手のマークが描かれ、体は、椅子に座っているというよりも、むしろ椅子から落ちてしまっている。そして、ショロトルの前には、「動き」を示すオリンのマークが描かれている。

同頁に描かれた図像は、語義的にも説明されるので、モリーナの辞書収録された、ショロを冠した約20語をみてみたい(表1)。品詞の変化形などをのぞくと、xoloca(正座する)、xolochoa(物を折り曲げる)、xolopiti(間抜け、愚か、馬鹿になる)、xoloni(膿む、炎症をおこす、腫れる)が主なものである。あえて大別すれば、二つに分類できよう。「正座」も「物を折り曲げる」ことも同義と考えれば、「折り曲げ、二重にする(なる)」というイメージが読み取れる。一方、「炎症を起こす」ことも、「間抜け、愚か、馬鹿になる」ことも、「物事が異常になる」ことを示していると考えられる。このように語義が明確にあてはまる図像であることから、この図像がショロトルと解されているのだろう。

この頁は、トナルポワリの20種類の記号の守護神が、並んで描かれているが、ショロトルは、オリンの守護神であることが示されている。折れ曲がっている一対の棒を組み合わせる記号には、折曲がる二重性と一組という二重性が含まれているようである。このオリンという記号は球戯とも関連が深く、オリンとショロトルは球戯における重要な要素を占めている⁵⁶。さらに、身体的には、ある種異常な状態である。眼球が飛び出しているのは、太陽創造神話で、神々が自らを生贄にしなくてはならなくなり、ショロトルが、目を泣き腫らしたこと表現しているのであろう⁵⁷。ここでは、病にかかったアウイテテオ(Ahuiteteo)の中の一柱としてショロトルが描かれていると解釈されている⁵⁸。アウイテテオとは、5柱一組の神で、それぞれマクイルケツパリ(Macuilcuetzpalin: 「5のトカゲ」)、マクイルコスカクアウフトリ(Macuilcozcacuauhtli: 「5のハゲワシ」)、マクイルトチトリ(Macuiltochtli: 「5のウサギ」)、マクイルショチトル(Macuilxochitl: 「5の花」)、マクイルマリナリ(Macuilmalinalli: 「5の草」)と呼ばれ、いずれもナワトル語で数字の5(macuilli)を示す、マクイル(macuil-)という言葉で冠している。絵文書で口元に描かれる手の記号は、「5(macuil-)」の表象である。5は、ミラーとタウベに拠れば過剰を表し、アウイテテオは飲酒や賭け事、性交など快楽に関する事柄が度を越した際の危険と罰を体現している⁵⁹。ショロ

トルの身体的異常性と、過度からくるアウイアテテオの異常性は、アステカの人々にとっては異常なものとして同じ範疇に入れられていたと考えることは、あながち的外れではあるまい。この場面のショロトルは、四肢の先端以外は、黒で表現されている。この図像からは、先の「人間創造神話」の解釈で述べたホラ貝の異常性に通じる、ショロトルの異常性が表現されていることがわかる。

つまり、「太陽の誕生神話」と「人間の創造」という二つの神話からは、次のようなことが読み取れる。ケツアルコアトルは、穴のあいていないホラ貝を音が出るようにし、骨を使い人間を創造する。エヘカトルも、ケツアルコアトルの分身、あるいは風の神として側面を表した姿であるので、太陽と月を正常な状態へと導くのは、ケツアルコアトルの役割として物語られている。このため、いずれの神話においても、ケツアルコアトルが成すべきことを遂行するために、ショロトルの存在が必要であったことが読み取れる。

さらにホラ貝が、金星の象徴であることはメソアメリカ研究者たち一般に受け入れられており、『ボルボン絵文書』の16頁に描かれたショロトルの胸には金星の象徴であるホラ貝の飾りが付けられている。このことから、ショロトルは「宵の明星」としての働きを担っていたと考えられるのである⁶⁰。

これまで「イヌ」そのものの表され方とは異なって、ショロトルには常とは異なる様子や状態が関係していることが明らかになってきたが、このことから「13のイツクイントリ」の別名がトラウイスカルパンテクトリとなっていることの意味を考えていきたい。

2-2. ショロトルとトラウイスカルパンテクトリ

『ボルボン絵文書』の16頁に描かれたショロトルの胸に、金星の表象がついていたことは前にも述べたとおりである。これと同じ描かれ方が、『ボルジア絵文書』にも見られる。

『ボルジア絵文書』の65頁では、動物の足を載せた供物台と「4のオリン」を前にショロトル神が椅子に座っている場面が描かれている⁶¹ (図8)。ショロトル神には夜行性のジャガーの斑紋が付されており、同時に斑紋のついた装身具を身に付けている。体は黒で表現されており、このことから、闇や夜と関連することがうかがえる。また胸のエカイラカツコスカトルから金星神との関係が示されているのは言うまでもない。腰には鳥の首を付けている。そして、左手には、『ロード絵文書』(図3)で、ミクトランテクトリが手にしていた針と同じ、折れ曲がった骨の針を持っている。この場面でもショロトルが、犠牲を捧げる者としての役割をもっていたことが推測される。

つまり、『ボルボン絵文書』の16頁からは、ショロトルが沈んだ太陽に付き添う「宵の明星」としての役割を担っていたと解釈することができ、また、『ボルジア絵文書』の65頁でも、ショロトルが夜や闇と関連する金星を象徴していると解釈することができた。

一方、先述したようにトラウイスカルパンテクトリは、「明けの明星」とされている。では、ショロトルとトラウイスカルパンテクトリが、どのように絵文書と神話に表されているかを見てみたい。

トラウイスカルパンテクトリは、『ボルジア絵文書』の53頁(図5)では、体が白と赤の縞模様で表現されている。髪の毛は黄色く、頭飾りは、黒い羽毛でできている。手には盾や槍、投槍器を持ち、戦闘的に描かれている⁶²。また、投槍器に付けた矢でチャルチウトリクエ(Chalchiuhtlicue: ジャガーのスカートをはいた女神)などを刺している場面が描かれている。また25頁では、目と鼻の回りが黒く塗られている。他の図像では、顔に5つの白い点が付される場合もある。

身体的な色はショロトルが、闇や夜と関連する黒が基調であったのに対して、トラウイスカルパンテクトリは、黒のほかに白や赤で描かれる。さらに星を表す白い点が付けられていることから、天体との関連が伺える⁶³。また、トラウイスカルパンテクトリが備えている物からは、前に述べた神話に登場する太陽に矢を投げつける場面が思い起こされる。この神は、太陽につき従うというよりも、対峙するという役割を持っている。さらに神話には、次のような件がある。矢を投げつけた後、この神は太陽に仕返しをされ、逆に太陽に矢で射られるのである。

金星神はケツアルコアトルである。それに加え、先にも述べたように、ケツアルコアトルの化身であるトラウイスカルパンテクトリは、「明けの明星」である。だとすれば、ショロトルは、「明けの明星」としてのトラウイスカルパンテクトリとは対照的に「宵の明星」としての働きを担っていたことになる。ショロトルは、沈み行く太陽つまり夜や闇と関連し、トラウイスカルパンテクトリは、昇り出る太陽つまり朝と関連する。トラウイスカルパンテクトリは、生まれたばかりの動かない太陽に、血を要求されたのに怒り、太陽に矢を投げつける存在で、太陽につき従い生贄を捧げるショロトルというイメージとは異なり、太陽と敵対し、生贄を捧げることに抵抗する存在と読むことができる。さらに、ショロトルは自ら生贄となるが、トラウイスカルパンテクトリは仕返しをされ、咎を負って殺されるのである。つまりショロトルは、死という文脈でも、トラウイスカルパンテクトリと、正反対のものとして位置付けられていると考えられる。よって、ショロトルは「宵の明星」であり、トラウイスカルパンテクトリは「明けの明星」という関係が明確に示された。いずれも金星としての特徴を持つこれらの二神は、金星の時間や空間における現れかたの違いによって、異なる役割をもって表現され、ケツアルコアトルが本来もっている「金星」という属性のうちのふたつの側面を、それぞれが表わしていると考えられよう。それゆえ、トナルポワリ(260日暦)の「13のイツクイントリ」の日は、ケツアルコアトルではなく、ショロトルによって表わされる宵の明星と対称性をもつトラウイスカルパンテクトリの別名となっていたと考えられよう。

3. イヌに与えられた意味と埋葬との関わりについて

トナルポワリ(260日暦)における、数字と組み合わせさせた「イツクイントリの日」それぞれの組み合わせに、特定の神々の名が結び付けられていたことは、「イツクイントリ」の日は、単に冥界の神ミクランテクトリがこの日に関連しているというだけではなく、

「犠牲」や「誕生」あるいは「再生」など、さまざまな事柄と関連付けられて考えられていたことを示していた。また、絵文書の中でイヌの特徴をもって描かれる「ショロトル」神は、こうしたモチーフに加え、「双子」や「変身」また、「異常性（常とは異なる形状や状態）」とも関連付けられていたことが明らかになった。さらに、太陽の創造や人間の創造に関わる神話の中で、ケツァルコアトルとともに語られるショロトルやトラウイスカルパンテクトリの特徴からは、「金星」を鍵として、「宵の明星」と「明けの明星」との対称性が示唆されているように思われる。

ここでは、これまで明らかにし得たことをまとめながら、イヌとショロトルがなぜ異なった図像で表現されているのか、また、ショロトルとトラウイスカルパンテクトリとが如何に対称性をもって表わされているのかについて考えてみたい。

3-1. イヌ、ショロトル、トラウイスカルパンテクトリの表象から読み取ることのできるアステカの世界観

暦や絵文書から読み取ることのできるイヌの役割と、絵文書や神話から読み取ることのできるショロトル神の役割を比較してみると、以下のようになる。

第一に、いずれも、夜、闇、死、あるいは犠牲と関連している。イヌは死者に付き添って、死そのものをまつとうすることができるよう、手助けをしており、また、夜を表わす図像とともに太陽に生贄を捧げている場面が描かれていた。同時に、ショロトルが太陽に生贄を捧げるのは、太陽が沈んだ後であり、ショロトル自身も、夜行性であるジャガーの斑紋を付けて描かれていた。

第二に、イヌもショロトルも、死者や沈んだ太陽という、いわば「生」としての力を失ったものに付き従う存在として描かれているだけではなく、生贄や供物を捧げる存在である。イヌが捧げる供物は、死者に対してなのか、死者を迎えたミクトランテクトリに対してなのか、図像からは判断できない。しかし、夜の太陽に生贄を捧げていることは、明らかである。一方、ショロトルについても、腰に下げた鳥の首（図8）や生贄を前にする姿（図6）などから考えると、太陽に生贄を捧げる役割を担っていたことは明らかであろう。

第三に、イヌもショロトルも、ともに現世あるいは地上からの「下降」というイメージで語られていることである。ショロトルは、天界から地上にいる人間に対して火をもたらすが、ここにおいても、天界から地上へという「下降」のイメージを読み取ることが可能である。言い換えれば、イヌもショロトルも、「上昇」のイメージを伴って語られてはいないということである。

第四に、「異常性」である。イヌの表象には、ショロトルの表象に見られるような、「折れ曲がった」あるいは「形がくずれた」という要素は顕著には表れてはいないが、絵文書を見る限りにおいて、「オリン（動き、地震）」との関係は明白である。ショロトルは、「オリン」の守護神として「4のオリン」や球戯と関連していると考えられるのである。イヌが描かれた図像にも同じ「4のオリン」が描かれていることは、イヌとショロトルの意味の類似性を示しているのだと考えられる。このことに関しては、数字の「4」や「オリン」のもつ意味

について、今後、さらに考察をしていく必要があるだろう。いずれにせよ、イヌも「死」という、生きた人間にとっては常とは異なる状態と関連し、ショロトルも「死」だけではなく、まさに身体的な「異常性」を伴って描かれ、語られていることは重要である。

このように見てくると、イヌとショロトルでは、前者は主に「人間」と関連付けられ、後者は主に「死んだ太陽」すなわち「夜の太陽」と関連づけられているように思われる。ともに、同じように付き添い、供物を捧げてはいるが、伴っている相手が「人間」なのか「太陽」なのか、その違いを明確に示しているようにも考えられるのである。「死者（人間、太陽）」に付き添うという意味においては共通するが、現実にとびとが暮らしている集団の中で起こる人間の死と、人間の手の及ばない太陽の死（即ち日没）とは、各々異なる事柄として表現されており、このふたつの事柄が、極めて類似したコンテキストの中で捉えられていたと考えることができよう。

さらに、ケツアルコアトルが関係する、「太陽の創造」や「人間の創造」にまつわる神話からは、ショロトルとトラウイスカルパンテクトリについて、以下のようなことが考えられる。

ショロトルが太陽に対して供物を捧げ、あるいは自ら生贄となる存在として語られているのに対し、トラウイスカルパンテクトリに関する記述には、同様な行為が見られない。むしろ、太陽に矢を射る存在として語られている。共に、ケツアルコアトルに象徴される金星の、「宵の明星」と「明けの明星」という特徴をもちながら、まったく異なった表わされ方をしているのである。これらの神話では、トラウイスカルパンテクトリではなく、むしろケツアルコアトルがさまざまな困難を克服し、太陽を動かしたり、人間を創造したりする任務を遂行しているのであり、「太陽の創造」神話を読む限りにおいては、トラウイスカルパンテクトリは、太陽が動くために必要な犠牲を拒むことによって、ケツアルコアトルが遂行しなくてはならない行為を妨げているようにも読み取れるのである。「明けの明星」として「太陽に付き従う」ということは、正反対な描かれ方である。トラウイスカルパンテクトリは、矢を持ち、生贄を射る存在でもある。このような意味において、ショロトルが生贄や供物を捧げることと同義だと考えることができるのだが、トラウイスカルパンテクトリは、何のために相手を射抜こうとするのだろうか。この点については、トラウイスカルパンテクトリに関する神話が少なく、図像の解釈もまだ進んでいないことから、今後の課題としたい。ここでは、ショロトルが生贄を捧げる相手や目的が、死者、ミクトランテクトリ、そして死んだ太陽（夜の太陽）であることが明確であるのに対し、トラウイスカルパンテクトリについては、その点が不明瞭であることが、むしろショロトルとの対称性を示唆しているのではないかと考えるにとどめたい。

3-2. 埋葬との関係について

最後に、本稿の出発点となった埋葬について、これまで明らかになったことを踏まえて考えてみたい。すでに述べたように、ショロトルが日没後の太陽に付き添う存在であったのと

同じように、イヌは死んだ人間に付き添う存在であったと考えられていたことは明らかである。冒頭に述べたように、イヌやイヌの象形土器が人間の埋葬に伴っていたのは、こうした世界観に基づいて行われていたのだと解釈することができるだろう。

このような一連の体系から、埋葬のコンテキストを理解すれば、ショロトルやケツアルコアトルの表象として表わされたエカイラカツコスカトル、つまりホラ貝も、象徴的意味が自ずと明らかになる。埋葬に伴って、ホラ貝も土製品として出土するが、その例はきわめて少ない。イヌ型象形土器が出土する割合と比較した場合、その数は比べものにならない。また実物のほら貝も、高位の人物に伴って副葬されている場合があり、これまでも少数ではあるが考古学的調査により、発見されている⁶⁴。

埋葬におけるホラ貝も、こうした文化的体系の中で意味を与えられ、埋葬のコンテキストで登場すると考えられよう。ホラ貝は、王権のシンボルだから埋葬された⁶⁵とも、豊穡を表現するもの⁶⁶だから副葬されたとも解釈されてきたが、神話的コンテキストの中で解釈していくことも必要であろう。すなわち、「人間の創造」に関わる神話において、ホラ貝は、むしろ「創造」や「再生」に必要な要素であって、イヌが付き添う人間の死の場面においては、基本的には描かれてはいない要素であることに留意しなくてはならないのである。だからこそ、限定された被葬者（王など、高位の人物が想定される）、つまり再生を願うごく少数の人々に限って、ホラ貝が副葬品として納められ、被葬者の再生を図ろうとしたと考えられるのである。言い換えれば、多数のイヌ型象形土器も同じように、彼らの象徴体系の中で意味を与えられ副葬されていたことを裏付ける傍証となるだろう。むしろこのように象徴体系に従った解釈のほうが、無理なく彼らの世界観に適合するのである。

象徴的体系に位置づけられたイヌは、アステカのパンテオンではショロトルと関連し、天体としては金星神とくに宵の明星と関連する（図9 埋葬に関する象徴体系を参照）。それぞれ相互補完的な特徴を示しており、それぞれの世界で果す役割はほぼ同じと考えることができる。イヌは人間に付き従い、金星は太陽に付き従い、ショロトルはトナティウに付き従う。さらに、その際は人間が死ぬときであり、太陽が没するときであり、太陽神が大地の怪物に飲み込まれるときである。また金星神は双子であり、ショロトルとトラウイスカルパンテクトリが対置される。これは、天体では宵の明星と明けの明星に一致する。地上の世界で言えば、イヌとホラ貝が対称的なものとして現れる。これらの対立するグループは、生死という場面で、不即不離の関係を生み出している。主人の死に際し、イヌが埋葬されるということは、太陽が没する際に見える金星に擬え、太陽神に生贄を捧げるショロトルに喩えられて考えられていたからだろう。換言すれば、彼らの天界や天体に見られる死生観の投影として、埋葬にもそのような比喩が使われた、またはその逆に、彼らの死生観が天体や天界と深く関連していると考えられるのである。

繰り返すが、夜や闇は、人間の死後の世界、冥界を特徴付けるものとして、イヌに付された特徴であろう。また、これまでも『ロード絵文書』から言われてきたように、イヌは冥界と関連し、死者に付き従う存在だから副葬されたのであり、地上から地下へという埋葬は、生から死に対応し、下降という方向性で象徴される。イヌはこの方向性を象徴するものとし

て埋葬というコンテキストのなかに登場するのだろう。さらに下降する際、生贄を捧げ、力を失ったものに活力を与えるという特徴も、イヌが副葬される際の理由となったのであろう。

おわりに

本稿では、先スペイン期のメソアメリカにおいて、なぜイヌあるいはイヌの象形土器が人間とともに埋葬されているのかという理由を、イヌの象徴的役割から考察し、文化的脈絡の中で考察することが目的であった。まず、イヌの記号が表されている260日暦では、イツクイントリの記号の守護神ミクトランテクトリのほかにも、数字と組み合わせることで、シベ・トテック、シウテクトリ、チャンティコ、トラウイスカルパンテクトリという特定の神々と結び付けられており、1) ミクトランテクトリからは、死者に付き添うイヌの役割、2) シベ・トテックからは、生命の誕生や再生のために供犠を執り行う役割、3) シウテクトリやチャンティコからは、再生に必要な火との関係、4) トラウイスカルパンテクトリからは、金星との関わりが明らかになった。

ショロトルとケツアルコアトルとの関係からは、1) ショロトルがケツアルコアトルの手助けをしており、それがイヌと死者との関係と類似していることが、明らかにされた。また、2) 神話の内容から、ショロトルの持つ異常性や異形性が読み取れ、このことが絵文書に描かれたショロトルの姿そのものと一致していることを指摘した。さらに、ショロトルとトラウイスカルパンテクトリは、各々、「宵の明星」と「明けの明星」の役割を担っており、きわめて対称的に表現されていることを指摘した。

ついで、神話や絵文書に見られるイヌとショロトルの役割を比較した。イヌとショロトルは、同じように付き添い、供物を捧げる存在ではあるが、現実にかかる人間の死と、太陽の死（即ち日没）とその行為の対象が異なる。しかし、極めて類似したコンテキストの中で捉えられていた。両者とも、夜、闇、死、犠牲と関連し、イヌは死者に、ショロトルは太陽に生贄を捧げるのである。つまり「生」としての力を失い「下降」するものに付き従う存在で、生贄や供物を捧げるのである。ただし、ショロトルのもつ「異常性」に関しては、イヌの表象に顕著に表れることはないが、「オリン（動き、地震）」との関係は明白である。さらに、「太陽の創造」や「人間の創造」にまつわる神話からは、ショロトルとトラウイスカルパンテクトリについての金星神を介した対称性が示された。

最後に、イヌと対照的な機能をもつ象徴として、ほら貝を取り上げ、実際の埋葬において使用される象徴の可能性を指摘した。宵の明星ショロトルと明けの明星ケツアルコアトルという二項対立から、埋葬においてもイヌは、ほら貝と対称をなすものとして考えるべきであろう。絵文書に見られるショロトルは、宵の明星を象徴しており、沈む太陽を闇の世界、つまり他界へ導く存在である。それと同時に、西に傾き力を失って地下界へ下っていく太陽に生贄を捧げる役割を担っている。この神話世界におけるショロトル神と太陽神をつなぐ関係性は、現実世界のイヌと人間をつなぐ関係性と同じであると思われる。死に行く人は没する太陽、イヌはそれに付き添う宵の明星として認識され、埋葬されたのだろう。なぜなら、イヌは、金星とも関連し死者の魂を死後の世界、他界へ導く存在であり、人は死に瀕し力を失

い、イヌに付き従われる存在だからである。ショロトルと宵の明星、イヌの三者は相互に関連し、一連の象徴的な体系をつくり、天界、天体、地上の世界に対応する形で、同じような役目を担っていることが解明された。繰り返すが、人々は天体の運行になぞらえた死生観をもっていたからこそ、その体系に従い、宵の明星である金星ショロトルの具現的形態であるイヌを副葬したと考えられよう。

さらに、「イツクイントリの日」と神々の関係には、1) 死と関わる冥界の神、2) 生贄と再生に関係する火、3) 再生と関わる明けの明星神という一連の流れが、順序良く並んでいることは、重要であろう。暦と神話、儀礼、そして絵文書に書かれている内容は、互いに深く結びついており、その結びつき方が極めて構造的であると考えられるのである。本稿を手掛かりに、今後も先スペイン期のメソアメリカにおける暦の構造を紐解いていき、当時の世界観について深く追究していきたい。

謝辞 横山玲子先生ならびに松本亮三先生には、貴重な御教示をいただいた。最後に感謝申し上げます。

-
- 1 Romano 1974, pp.34-35.
 - 2 その多くは盗掘品であるが、イサベル・ケリー (Isabel Kelly) は、赤色象形土偶の多くはコリマ州のコマラ (Comala) 相に由来するものだと指摘している (Kelly 1980, p.6)。
 - 3 先スペイン期のメソアメリカでは、イヌの特定種が食用とされていた (Baus 1998, p.15)。
 - 4 ゼーラーは、イヌは死者の付添いで、親切な召使であったと述べている (Seler 1963, vol. I, p.97)。
 - 5 Sahagún 1999, pp. 205-207.
 - 6 チコナワバンとは、「9の川」の意味である (Nicholson 1971, pp.395-446, table 2.)。
 - 7 Schöndube 1997, p.9.
 - 8 Baus 1998, p.32.
 - 9 ショロトルは、テスココ (Teztlucuo) 王国の建国者として、『ショロトル文書 (Códice Xolotl)』 (Dibble 1951) に登場する人物の名前でもある。
 - 10 Baus 1998 p.28.
 - 11 Sahagún 1999, p.628.
 - 12 Clavijero 1991, p.198.
 - 13 Sahagún 1999, Libro II.
 - 14 Sahagún 1999, Libro IV.
 - 15 ネコ科動物で、黒い縞と斑紋がありジャガーの特徴を有するが、体長は1 m程度とジャガーよりも小型である。
 - 16 例えば、他にイヌの日文字は『バチカン絵文書 (Codex Vaticanus 3738)』 21rに記されている。

- 17 Caso 1967, p.194.
- 18 ミラーとタウベは、「1のイツクイントリ」を司るのは、シベ・トテックとケツアルコアトルであると述べている（ミラー、タウベ 2000, p.66.）。
- 19 *Codex Laud*, pp.1-5, 2D, 3D. 図像解釈は、メルセデス・デ・ラ・ガルサ（Garza 1997）によった。『ロード絵文書』の頁は、ボードリアン図書館（Bodleian Library）番号を使用した。
- 20 Garza 1997, p.119.
- 21 図像解釈は、ゼーラー 1963に依拠している。
- 22 さらに、イヌの語彙からも、イヌに対する基本的な観念が見て取れるので、まとめておく。トラルチチやテチチに含まれるchichiは、モリーナ（Molina 1992, p. 20.）に拠れば、「唾液（chichitl）」でありイヌが舌を出し唾をたらす様子からこの名前が付いていることが伺える。トラルは、「土地、大地（tlalli）」、テチチのテは、「石（tetl）」と思われる。ナワトル語の名詞には、他の語と複合語を構成する場合、接尾辞（-tli, -tl, -li, -in）が脱落する。teは、動詞の目的格不定人称代名詞「誰かを」と解釈することも可能と思われるが、テトラミン（tetlamin）に関しても、tetlのteと別の一語の組み合わせであろう。tlamina（走る）という動詞との組み合わせであれば、イヌの「走る」という行動的な特徴を示し、tlami（終わる、死ぬ）という他の動詞がtlaminの語源とすれば、死の観念との関係性が生じてくる。
- 23 Garza 1986, p.119.
- 24 Garza 1986, p.120.この動物はサルの可能性が高いとゼーラーは主張するが（Seler 1963 vol. II, p. 237）、その根拠はサルが同じマリナリ（草）色で描かれるからとしており、根拠に乏しい。
- 25 古代メソアメリカでも、日本と同様に、月の表面にウサギをみていた（ミラー、タウベ 2000, p.78.）。
- 26 Molina 1992[1571].
- 27 Sahagún 1999, pp.45, 78-79, 163. サアグンによれば、シベ・トテックの起源は、メキシコ西部のハリスコ州ツァポトラン（Tzapotlan）である（Sahagún 1999, p.45）。
- 28 ミラー、タウベ 2000, pp.161-162.
- 29 火は、マヤの『ドレスデン絵文書（*Codex Dresden*）』では、天からイヌによってもたらされたものとされ、イヌは火をもたらした文化英雄として位置づけられている（Garza 1986, p.123.）。
- 30 Códice Chimalpopoca 1975.
- 31 Códice Chimalpopoca, pp.119-128.
- 32 同文書には、イヌと人の関係についても記されている。[現在は、五番目の太陽の時代であるが、四番目の太陽の時代は、「4の水」という名前で、52年間雨が続いた。これらの年が終わるころ、ティトラワカン（Titlahuacan）神は、タタ（Tata）という名の男とネネ（Nene）という彼の妻を呼び、「空も沈んでしまうので、大木を切抜いて、そこに隠れなさい」

と告げる。言われたとおりに、二人は木にもぐりこんだ。そこで再び、神は「トウモロコシの穂軸だけを食べなさい」と命じる。トウモロコシを食べ終わったとき、水が引き、割り舟は動かなくなった。そこで二人は、蓋を空け外に出たが、魚を見つけ焼いて食べてしまった。約束を破った彼らは、頭を切られた。そして、その頭は尻につけられて、彼らはイヌにされてしまった (*Códice Chimalpopoca*, p.120.)。] この神話に関しては、4番目の太陽の時代、生き残った人間が、イヌに変えられてしまったことが語られている。ゼーラーに拠れば、トナルポワリに現れる動物の記号の中では、唯一心臓が描かれる動物であり、生贄として人間と置換可能な存在であることが伺える (Seler 1963 I, P.15.)。

33 *Códice Chimalpopoca*, pp.120.

34 Spence 1923, pp.319-324.

35 *Códice Chimalpopoca*, p.11.ただし、これは神ではなく、伝説上の王である。

36 ミラー、タウベ 2000, p.238.

37 *Códice Chimalpopoca*, p.122.

38 この場面の図像の同定と解釈は、ゼーラーに依拠する (Seler 1963, vol.I, p.122)。

39 Seler 1963, vol.II, p.222.

40 Garza 1997, 128.

41 ミラー、タウベ 2000, p.176。「ナワル」とは、ナワトル語のnaualliに由来し、変身する魔術師 (negromático) または、魔女 (bruja) とも解される。これは、明らかに先住民起源の概念であり、シャーマンの力やシャーマンの変身に密接に関係していた (ミラー、タウベ 2000, p.249.)。

42 Seler 1975, p.66.

43 Seler 1975, p.65.ゼーラーは、また、ショロトルとナナワツインとの同一性や、シベ・トテックとの類似性も指摘している。

44 Spence 1923, pp.344-349.

45 Séjourné 1962, pp.70-72.

46 *Códice Chimalpopoca*, pp.120-121.

47 この神話では、表記が定まっていないので、神々の名称が若干異なるが、ミクトランテウクトリはミクトランテクトリ、ケツアルコワトルはケツアルコアトルと同一であることは間違いない。

48 ミラー、タウベ 2000, p.202.

49 Spence pp.40-42. Soustelle 1961 p.106. 彼らは、メンディエタ (G. de Mendieta 1870) の記録をもとに解釈を行っている。

50 アショロトルとは、アホロトル (axolotl) と言う学名を持つメキシコ産のサンショウウオの一種で、日本ではウーパールーパーとして知られている。このアショロトルは薄い皮膚や鰭のような尾を残し、また鰓が体外に出たまま幼生の形態で成長する。環境に特化し、異様な形態をしており、現在ではメキシコ盆地のショチミルコにしか生息していない。この異様な形態からショロトルとの関連が考えられたのだろう。アショロトル

という言葉は、「水 (atl)」と「ショロトル (xolotl)」という二つの単語の合成語である。

51 Sahagún 1999, p.432.

52 Molina 1992, p. 23.

53 ヤシュチュラン遺跡、第33号神殿、階段第7段目の石彫の解釈として、横山は、階段の下で膝を折る「鳥=ジャガー」王と、その背後に、金星の印をつけた二人の人物が描かれていると解釈している（横山 2000, p.95）。また、メキシコのプエブラ州に位置するカカシュトラ (Cacaxtla) 遺跡には、金星の神殿の入口の脇柱に、それぞれ金星神が描かれている（Weaver 1993, p.211: figure 6.15; p.212: figure 6.16）。

54 横山 1992, pp.28-29. マヤでは、シバルバー (Xibalbá) という他界で、焼身自殺をした双子の英雄の肉体を再生させるもとなったのは、彼らの骨であったことに横山は注目している。

55 図像の同定は、ゼーラーによる注釈のついた *Códice Borgia* (1963, p.10) による。

56 メソアメリカでは、古くから球戯が行われてきた。球戯は、2000年の歴史があり、メソアメリカ全土で見られるとタラドワイア (Taladoire 1994) は述べている。メキシコ西部にも竖坑墓の時代より球戯場が確認されている (Weigand 1992)。また土器としては非常に珍しく、球戯を行う人々をテーマにした土製品も出土している (Day 1998他)。これまで球戯とショロトルの関連については、球戯場のパネルからも指摘されてきた。タヒンの南球戯場では、ショロトルと思われるイヌの顔を持った人物が北西のパネルに刻まれている。このパネルは天上と地上の間が二つの部分に分かれ、左3分の2は球戯場、右3分の1は壺のようなものから上半身を出している骸骨が彫られている。左の球戯場の場面では、4人の人物で構成されており、場面の両端に球戯場の基壇が描かれている (Spinden 1933, pp.251-252)。二つの基壇の間には、球戯用のボールと思われる円とオリンが彫られている。この二つのアイテムの両側には、ユーゴ (防具の一種) や頭飾りをつけた球戯者が二人向き合って何やら話をしている。それは口の前に書かれる渦巻き模様から推測される。下肢が正面を向いている人物の後ろには、イヌの顔を持つ存在が球戯場の基壇上に跪くような形で座っている。左手には、先が折れ曲がった棒を持っている。これは、『ボルジア絵文書』や『ロード絵文書』に見られる骨の針を思い起こさせる。この人物はイヌの容姿を持つ神ショロトル、またはショロトルが変装した聖職者であるとスピンデンは解釈している。ショロトルはタヒンにおける球戯の神であり、問題の人物はケツェルコアトルと双子に当たるイヌのショロトル神を思わせる特徴を持っているとラドロ・デ・ゲバラ (Ladrón de Guevara 2000, p.51-52) も解釈している。またサアゲンは、アタマルクアリストリ (Atamalqualistli) の祭で、「ショロトルは球戯をする、球戯の支配者である」という歌が歌われるとも記している (Seler 1963, vol.I, pp.143-144から引用)。ショロトルと球戯は密接に繋がっていることは、これまでの研究からも明らかである (Spinden 1933, pp.253-254.)。

57 松村は、「この種の神話は、神の姿の異様さを説明するために後でつくり出されたもの」で、換言すれば「形態の異常性がまず存在して、それに関する物語は、それを基として

生まれ出るのが普通の経路である」と指摘する（松村 1980, p.52）。

- 58 Seler 1963, vol.II, p.78.
- 59 ミラー、タウベ 2000, p.54.
- 60 Baus 1998, p.28.
- 61 図像の同定は、ゼーラーによる注釈のついた *Códice Borgia* (1963, p.65) による。図像解釈は、太陽を死者の世界へ導くイヌであるシヨロトルとするゼーラーの解釈に依拠する（Seler 1963, vol. I, pp.221-222）。
- 62 Spence 1923, pp.319-324.
- 63 Spence 1923, p.319.
- 64 1993年、ハリスコ州テキーラ村（Tequila）近郊、ウイツィラパ遺跡（Huitzilapa）で、約2000年前の大型の竪坑墓（shaft tumb）が発見された。この墓は、一つのシャフトに、二つの墓室が接続しているもので、未盗掘の竪坑墓としては、最大級のものである。被葬者は、いずれの墓室でも頭頂をシャフト方向に向け、それぞれほぼ平行に伸展の状態で葬られている。北側の墓室には、3体（N1-N3）が埋葬されており、多数の副葬品が見つかった。ほら貝は、計8個出土したが、三つは東よりの被葬者N1の股間部分に置かれ、他の五つもN1の周囲に置かれている。南側の墓室にも3体（S1-S3）埋葬されており、西側に安置された遺体S1だけが股間部分にほら貝を一つだけ有している（López and Ramos 1998）。
- 65 グラハムは、高地マヤ、テオティワカン、オルメカなどの例を挙げ、ほら貝は、広くメソアメリカで権力を象徴するものとして扱われてきたことを指摘している。ほら貝は、実物のほかにも人物土偶の一要素として象形土器に登場する。ほら貝の頭飾りを載せている人物像や、手にほら貝を持つ座像などである。これらほら貝の要素を所有するものは、メキシコ西部では族長と考えられ、ほら貝は王権の象徴として考えられている（Graham 1998）。
- 66 ロペスとラモスは、ウイツィラパのN1は豊穡というシンボルと深く結びつくとしている。なぜなら、貝は水や水の神と関連するだけでなく、貝から現れる人物というモチーフがメソアメリカで繰り返されており、貝が女性の子宮を連想させるものだからである。ほら貝が男性の陰部に配置されていることは、生命と死という相互補完的な原理において、誕生を示すと考えられ、副葬品の一部を構成していると彼らは述べている（López and Ramos 1998, p. 66）。

引用文献

Baus Czitrom, Carolyn

1998 *Los Perros de la Antigua Provincia de Colima*, Instituto Nacional de Antropología e Historia, Colección Obra Diversa, México

Clavijero, Francisco Javier

1991[1780] *Historia Antigua de México*, Editorial Porrúa, México.

Cartwright Brundage, Burr

1979 *The Fifth Sun Aztec Gods, Aztec World*, University of Texas Press, Austin.

Caso, Alfonso

1967 *Los Calendarios Prehispanicos*, UNAM.

Codex Borbonicus, 1974, ed. K. Nowotny, Akademische Druck-u. Verlagsanstalt, Graz, Austria.

Codex Borgia, 1976, ed. K. Nowotny, Akademische Druck-u. Verlagsanstalt, Graz, Austria.

Codex Laud, 1966, ed. C. Burland, Akademische Druck-u. Verlagsanstalt, Graz, Austria.

Codex Vaticanus 3738, 1979, Akademische Druck-u. Verlagsanstalt, Graz, Austria.

Códice Borgía, 1963, comentarios de Eduard Seler, México, Fondo de Cultura Económica.

Códice Chimalpopoca : anales de Cuauhtitlan y leyenda de los soles, 1975, trans. and ed. Primo Feliciano Velázquez, Universidad Nacional Autónoma de México-Instituto de Investigaciones Historicas, Mexico City.

Códice Telleriano-Remensis, 1964, Antigüedades de México, basadas en la recopilación de Lord Kingsborough, v. III, México, Secretaría de Hacienda y Crédito Público.

Códice Xolotl, 1951, edicion, estudio y apendice de Charles E. Dibble. Universidad Nacional Autónoma de México, México, 1980.

Day, Jane Stevenson

1998 "The West Mexican Ballgame", *Ancient West Mexico : Art and Archaeology of the Unknown Past*, edited by Richard F. Townsend, pp.151-167, Thames and Hudson.

Garza, Mercedes de la

1997 "Perro como Simbolo Religioso entre los Mayas y los Nahuas", *Estudios de Nahuatl*, vol.27, pp.111-133.

Graham, Mark Miller

1998 "The Iconography of Rulership in Ancient West Mexico", *Ancient West Mexico: Art and Archaeology of the Unknown Past*, edited by Richard F. Townsend, pp.191-203, Thames and Hudson.

Kelly, Isabel

1980 *Ceramic Sequence in Colima: Capacha an Early Phase*, University of Arizona Press, Tucson.

Ladrón de Guevara, Sara

2000 *Imagen y Pensamiento en el Tajín*, Universidad Veracruzana, Xalapa, INAH, México.

López Mestas Cabrerros, Lorenza and Jorge Ramos de la Vega

1998 “Excavating the Tomb at Huitzilapa”, *Ancient West Mexico: Art and Archaeology of the Unknown Past*, edited by Richard F. Townsend, pp.53-69.

松村武雄

1980 『メキシコの神話伝説』、世界神話伝説体系 16、名著普及会。

ミラー, メアリ・、カール・タウベ

2000 『マヤ・アステカ神話宗教事典』、東林書房。

Mendieta, Gerónimo de

1870 *Historia Ecclesiastica Indiana*, Icazbalceta, México.

Molina, Fray Alonso de

1992[1571] *Vocabulario en Lengua Castellana y Mexicana y Mexicana y Castellana*
Edición Facsimile [Vocabulario en Lengva Castellana y Mexicana], Editorial Porrúa S.A. México D.F.

Nicholson, Henry B.

1971 Religion in Pre-Hispanic Central Mexico, (In) *Handbook of Middle American Indians, vol. 10*, University of Texas Press, Austin.

Romano, Arturo

1974 “Restos óseos humanos precerámicos de México”, *Antropología Física. Epoca prehispánica*, INAH, México.

Sahagun, Fray Bernardino de

1999[1579?] *Historia General de las Cosas de Nueva España*, Editorial Porrúa, México.

Schöndube, Otto B.

1997 “Espejo de la Vida : Arte Funerario del Occidente de México”, 「古代メキシコ、土の象形」, サントリー美術館。

Séjourné, Laurette

1962 *El Universo de Quetzalcoatl*, Fondo de Cultura Económica, México.

Seler, Eduard

1975(1904) “Ancient Mexican feather ornaments”, *Mexican and Central American antiquities, calendar systems, and history : twenty-four papers*, (Bulletin (Smithsonian Institution. Bureau of American Ethnology); 28), pp.57-74, B. Ethridge Books, Detroit.

1963 *Comentarios al Códice Borgia, 2 vols.*, Fondo de Cultura Económica, México - Buenos Aires.

Solórzano, Federico A., Otto B. Schöndube et al.

1980 *Historia de Jalisco*, vol.I, Gobierno del Estado Jalisco, INAH, Guadalajara.

Soustelle, Jacques

吉田 晃章

1961 *Daily Life of the Aztecs*, Stanford University Press, Stanford, California.

Spence, Lewis

1923 *The God of Mexico*, T. Fisher Unwin LTD, London.

1994(1913) *The Myths of Mexico and Peru*. Dover Publications, Ing., New York.

Spinden, Ellin S.

1933 “The Place of Tajin in Totonac Archaeology”, *American Anthropologist*, new series, vol.35, num.2, pp.224-270.

Taladoire, Eric

1994 “El juego de pelota predolombiano”, *Arqueología Mexicana*, vol. II, núm. 9, pp.6-15.

Weaver, Muriel Porter

1993 *The Aztecs, Maya, and Their Predecessors*, third edition, Academic Press.

Weigand, Phil C.

1992 “El juego de pelota prehispánico y las canchas de pelota de Jalisco y Nayarit: la tradición de Teuchitlán”. *El Juego de Pelota en Mesoamérica*, Siglo Veintiuno Editores, México, pp. 237-263.

横山玲子

1992 「マヤにおける水界と他界」、『文明研究』第 11 号、17-36 頁、東海大学文明学会。

2000 「球戯と王権—マヤの神話『ポポル・ヴフ』に語られた世代交代と権力の継承」、『時間と支配—時間と空間の文明学—』、91-124 頁、東海大学出版会。



図1 犬型象形土器 (図録「古代メキシコ、土の象形」1997, p.41, Fig. 65)



図2 ボルジア絵文書 (Codex Borgia 部分)

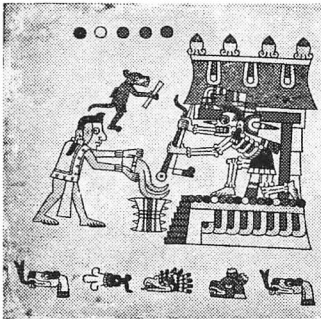


図3 ロード絵文書 (Codex Laud, 1966, p.3D 部分)

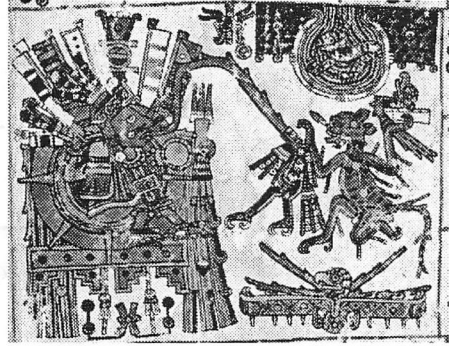


図4 ボルジア絵文書 (Codex Borgia 1976, p.71 部分)



図5 ボルジア絵文書 (Codex Borgia 1976, p.53 部分)

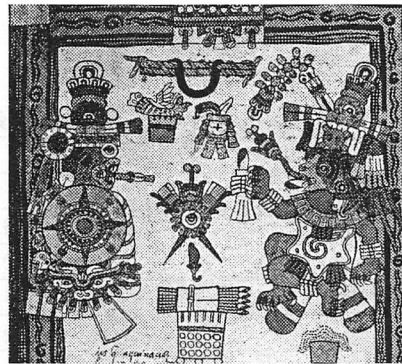


図6 ボルボン絵文書 (Codex Borbonicus, 1974, p.16 部分)

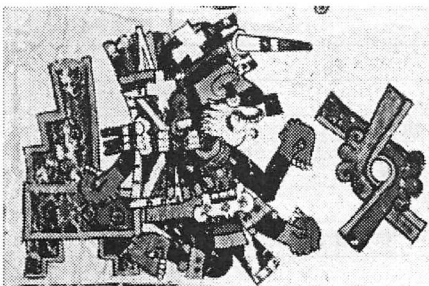


図7 ボルジア絵文書 (Codex Borgia 1976, p.10 部分)

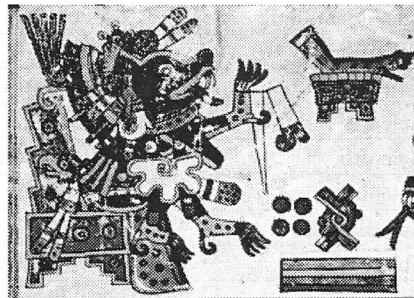


図8 ボルジア絵文書 (Codex Borgia 1976, p.65 部分)

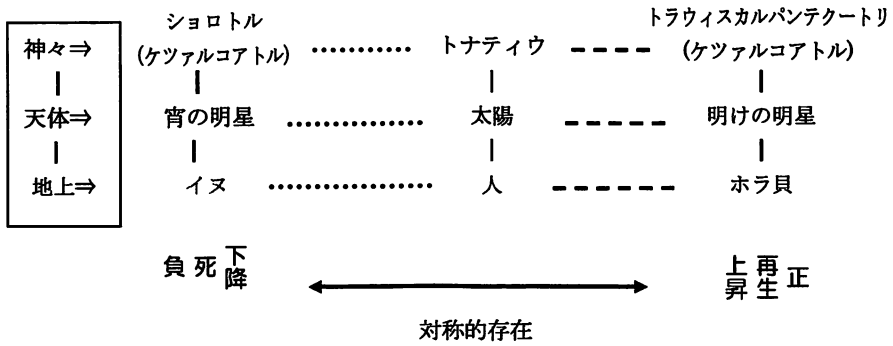


図9 埋葬に関する象徴体系

表1 xoloを冠する語彙(Molina 1992, pp.160-161)

Xoloca	正座する
Xolochalhuia	何かを折りたたみ他のものに合わせる、しわを寄せる
Xolochau	年をとり皺がよる
Xolochoa	しわを寄せる、何かを折りたたむ
Xolochtic	しわが寄った物
Xolochtlalia	折りたたむ、何かにしわを寄せる
Xolochitli	しわの寄った物のしわ
Xoloni	ただれ・腫れ物が悪化する
Xolopicuitia	誰かに馬鹿なこと、愚かなことをする
Xolopinemi	馬鹿な、しつけの悪い
Xolopinemiztli	愚かさ
Xolopitica	愚かにも
Xolopiotl	あまりの愚かさ
Xolopiti	馬鹿になる
Xolopitli	間抜けな、馬鹿な
Xolopiua	愚かなことをする、愚かなことを言う
Xolotilmatli	王族に使えた小姓の服装
Xoloto	小姓、召使の縮小辞
Xolouia	すり棒を使って何かをすり潰す